

381 子宮疾患におけるMRI像

金沢医大

安沢紀夫, 吉田勝彦, 高木弘明, 桑原惣隆

[目的] Magnetic Resonance Imaging (MRI) はMR現象を応用した原理に基づいている。当院では昭和60年4月より静磁場0.5Tとした超電導型MRIを設置導入し臨床的評価を行っている。前回子宮付属器腫瘍について発表を行ったが、今回は代表的な子宮疾患29症例につき臨床的検討を行ったので報告する。[方法] 胞状奇胎1例, 子宮筋腫8例(筋腫核3例を含む), 子宮体癌3例(いずれもstage I期), 子宮頸癌17例(stage Ib期: 1例, stage II期: 2例, stage III期: 8例, stage IV期: 6例のうち子宮瘤膿腫2例を含む)である。[成績] 胞状奇胎は嚢胞状構造に由来し顆粒状パターンを呈した。子宮筋腫は低信号の結節像として描画され T_1 値/ T_2 値は658.0msec/42.8msecを示し、変性筋腫核では信号強度増大また不正形領域として描画され T_1 値/ T_2 値はそれよりも延長を示した。子宮体癌は T_2 強調像で病変部は子宮筋層よりも高信号領域を示し子宮体中央領域は年齢に比し厚く、形態不正像として描画され T_1 値/ T_2 値は774.4msec/72.8msecであった。子宮頸癌も T_2 強調像で頸部病変部は高信号領域として描画された。また子宮瘤膿腫, 子宮体部方向への癌侵潤把握に矢状断像が特に有効であった。 T_1 値/ T_2 値は771.7msec/73.7msecを示した。[結論] (1) T_2 強調像で筋腫核を子宮筋層のコントラストは良好となり筋腫核の数, 大きさ, 位置などの診断が可能である。(2) 胞状奇胎は嚢胞構造に由来し顆粒状外観を呈した。(3) 癌組織は T_2 強調像で高信号領域として描画され、頸癌, 体癌の緩和時間は類似した値を呈した。

382 子宮頸癌骨盤リンパ節転移のCTによる術前評価に関する検討

国立病院四国がんセンター

茗荷浩志, 日浦昌道, 頼島 信, 横山 隆
田中基史, 千葉 丈

[目的] 効果的な子宮頸癌治療にはその腫瘍の広がり十分に把握しておくことが重要で、また治療後の再発も骨盤内に多い事より術前に骨盤内リンパ節転移の有無を予測することが肝要である。今回その予測にCTが有用か否かを検討した。[方法] 1985年1月から1988年8月に当科で診断治療した子宮頸癌(I期~IV期)166例のうち術前CTと手術(骨盤リンパ節廓清を含む)の両者を行った54例(Ia期2例, Ib期28例, IIa期10例, IIb期13例, IIIb期1例)についてCTでのリンパ節腫大, 術中所見(共に1cm以上を陽性)と病理組織学的所見(転移の有無)を比較検討した。[成績] Ia-IIa期の40例に於けるCT所見と組織所見との比較ではCTで腫大の見られた7例のうち4例に転移が証明され、転移の認められた5例のうち4例にCT上腫大を認め(sensitivity=80%(4/5)), 残りの1例は術中に腫大を認めず、組織学的にもmicro-metastasisであった。組織学的に転移を認めない35例のうち、3例がCT上腫大有りと判定された(specificity=91.4%(32/35))。accuracyは90%(36/40)であった。術中所見と組織所見との比較では組織学的に転移を認めた5例のうち、術中腫大の認められたのは4例であった(false negative=20%(1/5))。またIIb期以上の14例ではCT所見と組織所見との比較では, sensitivityが62.5%(5/8), specificityが83.3%(5/6), accuracyが71.3%(10/14)であった。術中所見と組織所見との比較ではfalse negativeが25%(2/8)であった。[結論] 術前のCTによる骨盤リンパ節転移の予測はCTそのもののもつ限界のため多少正確さには欠けるものの、かなり有用であると考えられ、今後傍大動脈節も含め検討していく予定である。